芭蕉翁句選

上 下

へ5
1841

夜叉謡譜といふものはむかしより世にあまた
其さへ唐よりもなかりせはあまたあれと
大和詞のものにあらすしてかへつて
其侍をおもひてあそひてあまたの句
汗温となりたる間萬上也
いにしへより俗ありて
能く読まて通し能く聡成
笑ひ出たるは高位博識也

門 へ 5 滅 1841

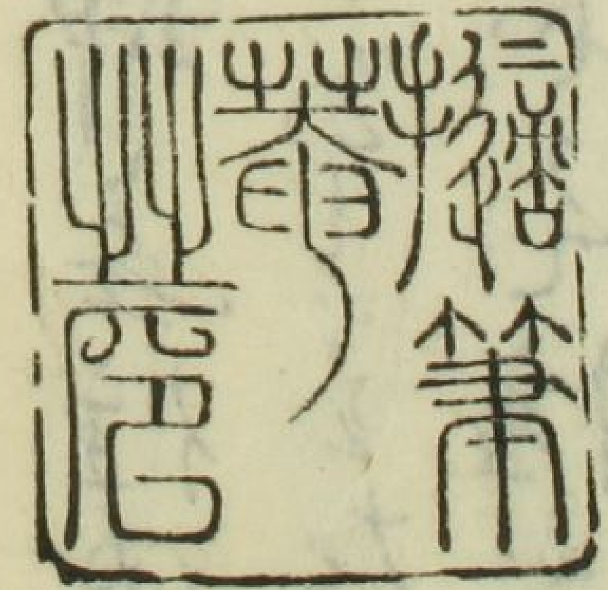
自在なるは賤家に短き手也
曲節をまたるを是を以て是哉
思ふに吾筆の愚なるにも又
彼がほく艸木鳥獣に名を識
とせる類ありけるよ貞享元禄
の頃にも俳風はきつくふみてしも文哉
味ひ其句哉試みに飛青に達
無上の魂をとゞめ　杜部郎。

俳諧抄まとまる五七五に前言千
万なる物も[illegible]宜く句を
此事にはまた是を風国に蕉
酒か集は[illegible]の足を
文きよに撰の[illegible]補ふに
[illegible]黄[illegible]哉
[illegible]都合六百三十余句なり
[illegible]

古しへの集はいつまてもいまた命
毛もなかりしかば万葉の四季を
わかち侍りて雑の句を添録して
名なれば芭蕉句選と題を給ふ
夕に是を翻閲すれば或は詠酒
の情物をもて或は哀別の意を
まくらに不知よに当月を愛哉
翻ひとく六時の四季のて津ま

ゆえ我観彼乾坤無住の
翁も同行二人とあれはこそまた
の事ありてかの人もやもて撰し
し侍し部して無常撰へて
同志の友を追加我撰ふ
風を似て例と尓ありしてあるも
五老井の識あるはありし述而
不作信而古を好といはん

惟皆元文之戊午秋も蓬生の
ますゑの家なりける其蓬ふる
日擲筆菴主人自序す



凡例

一四季の題は大概玉海集に従ひ猶小擬ひ季の雑は其季の末に載す
一連歌に用ひさる題は愚意にまかせて季節の部に小記ス
一月花なとむすひたる句は其句意を量りて雑の部に入れ
一此集に引用る書间写本もまゝあれし鳥

一 焉馬乃誤なくんはあらさるを恐れ

一 此集衆人の見に觸く後校合の委し
からさるを知閲而再校し粗その誤を補
ひて猶後人之参考に備ふ

[illegible]
炭俵

春之部

蓬莱は[illegible]伊勢[illegible]後
年[illegible]猿[illegible]の面
之見に田舎の見[illegible]
誰[illegible]似[illegible]朝の[illegible]
[illegible]花[illegible]
[illegible]五[illegible]

[illegible]友の
[illegible]酒[illegible]日[illegible]
[illegible]見[illegible]て

越人[illegible]尾冠[illegible]
[illegible]

小文庫に 鳴り渡り千年を越し
三日 世に出て氷もと

拾遺物の忍 句解
何と見れハ春の幸に三千とせの
竹林にゆくゆく若菜摘へく

二日にもぬかりはせしな花の春

湖沼が堂の菴に春拾はる時

三日閉口 題四日

大津絵の筆のはしめハ何佛

菎蒻にけふは売かつ若菜かな

一とせに一度つまるゝなつなかな

春立てまた九日の野山かな

南良忠へ

小文庫

丈六はやし此句義の
心あるよし何か問ふ
此無実なるい詳か
其を消氷集にも出り

春なれや名もなき山の朝霞

丈六に陽炎高し石の上

う月は春也縁に盡きる梯は是

三芳仙
都中暮いて皆秋風と梅林

うくひすや柳のうしろ藪のまへ

梅か香にのつと日の出る山路かな

山里ハ万歳おそし梅の花

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

梅白しきのふや鶴を盗まれし

子良館の後に梅ありといへは

御子良子の一もとゆかし梅の花

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

いろありて…古来よく…

網代民部が息に逢て
梅の木に猶やどり木や梅の花
さんめへのけしきもすに梅の花
旅がらす古巣は梅に成にけり
楚竹亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅
内人の何かしみちのくに下るを
鳥のなきをおもひて
京るめでよ藪の中なる梅の花
防川亭

発句の文字におもふまゝ
あるまじ

熱田の他
露の涼しき…
虎陽周圭…の句にて…
…とあり…

香梅さく家梅ゝけるにほひよき諸が
子共らよ梅折のこせ牛乃築
香に匂へうにほる岡の梅の花
何がし新八が亡りける一周忌に
文梅丸許へ一歳の友がもとく
折てに供立さる無縁の衣を
折もひ屋…
梅が香にきりし一字…
…梅も無念…
凍とけて筆に汲干す清水かな

○右言葉ニ於文 二月吉日にて是猶ヶ剃髪入道門と成べきを
浄土役のわざましにも担奴白狐政に
仏光にとらへし実の光とうやかして
人にも化され人とも妖をなと巫
醫の心をせあらむ 是ハ二月の詳とせり

○初午に狐の剃し頭かな
涅槃会や皺手合する珠数の音
伊賀にて
神垣や思ひもかけず涅槃像
不精さやかき起されし春の雨
春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏

此の小文に昔清水と
題なりて木下につたふ
清水かれと侍る
にこそ有ける

春雨の木下につたふ清水かな
[illegible]小杉より見えて柳かれ
八九間空で雨ふる柳哉
はれ物にさはる柳のしなへ哉
柳のさはる

鶯を魂にねむるか嬌柳
この句へ東武屋舗にて
梅柳さぞ若衆かな女かな
うかれける人や初瀬の山桜
[illegible]花入 探丸[illegible]
[illegible]我宿にて[illegible]
[illegible]葉胡の原[illegible]墨

伊賀新大佛之記あり 小文庫

丈六にかげろふ高し石の上
かれしばやまだかげろふの一二寸
花の雲鐘は上野か浅艸か

よし野まて

花さかり山は日ころのあさほらけ

葛城のふもとを過る

猶見たし花に明行神の顔

湖水の眺望

辛崎の松は花より朧にて

うへ野ゝ花見にまかり侍しに
人〻幕うちさはき物の音小唄
の声さま〳〵なりける傍の
松陰をたのみて

四ツ五器のそろはぬ花見心哉

大和の国平尾村にて

花の陰謡に似たる旅寝哉

伊賀の国花垣の庄は
其かみならの八重桜の料に附られ
けるといひつたへ侍れは

一里はみな花守の子孫かや

何某人の山家にありて

樫の木乃花にかまはぬすかたかな

春の夜の明るをおしん雨乃花

桃青三句負素堂ニ句し

さら〻祢浄ちらふうしと宮出花 [illegible]

[illegible]

花も宿ともに見て [illegible]

イヽ日ゟ花にいそて漸

任すあらふもさらら

此句さ別る也及人

かなしみ

四すゝり五器 [illegible] 湖 [illegible] 海

鶴下つまで七日花見るふもしらず

東行餞別

此さら [illegible] 推せよ [illegible] 器一具

[illegible] 琴乃塵

露沾 [illegible]

青山子の本の画ハ探幽へ琴ト笙ト太鼓トの讃のそれしふ

九 [illegible] や太鼓のうる [illegible] 春の声　素堂

右 [illegible]

けしからぬ桐の一葉や笙の声　其角

西行が菴もいつこんと花の庭

伊勢神法楽

此木の花ともさかふ白かな

二見北図を携て

うしかめ潮がかりも浦さ妻

桜さ花と [illegible]

[illegible] 乃心よ

花 [illegible] 七 [illegible] 泉

[illegible] 七 [illegible]

物皆自得

花にあそぶ虻なくらひそ友すゞめ

蝙蝠も出よ浮世の花に鳥

何したまく僧もこゝろ花の面

龍門にて

龍門の花や上戸は土產せん

酒のみにかたらんかゝる瀧の花

憂テハ方ニ知レ酒ノ聖ヲ貧シテハ

覺レ錢ノ神ヲ

花にうき世我酒白く食黒し

種芋や花のさかりに賣ありく

木のもとに汁も鱠も桜かな

春の夜は桜に明て仕舞けり

顔に似ぬ發句も出よはつ桜

小文庫に咲みだれと上五ありとぞ

宮中に北桃の中よりすゝむかな

何ふまれて酒のみ寄也散桜

山櫻瓦ふくもの先ふたつ

櫻狩きどくや日々に五里六里

よしのにて桜見せふぞ檜木笠

故主蟬吟公の庭前にて

さま〳〵の事おもひ出す桜哉

鶴尾羽にハ霧の巣と見へけるを

山家

鶴は巣をつくりけるの櫻か紅
又いとも世を我経て故人ありし
命かな川中に住てもあさかるを

加州白山奉納

ちるや海の紅葉は水も山さくら
あら七宝七堂伽藍ハ蓮台なれ
かな経は也茸に路の海苔なかは
草の花に露あるさま也
しらき中の蘭のかさにも

はなの也されて白紙よりの一寸
節はその画にも似けるかな

蜆子讃

さて実也見えさ国我明法の網

伏見西岸寺任口上人にまいりて

我衣にふしぬ花の宿せよ

にしをのもとに侍るの

草菴の桃櫻ハ門人に

甚角亭にて

友は来て桜也にて花盛
内裏雛人形の御宇とよ

松嶋の月先心にかゝりて住る
方は人に譲り杉風か別墅に
移る

草の戸も住替る代そ雛の家　おくの細道

青柳の泥にしたるゝ汐干かな

永き日も囀たらぬひばり哉

原中やものにもつかず啼雲雀

大和国ニ行脚ノ時
臍峠ニ題
雲雀より上にやすらふ峠かな　あら野　旅

雲雀啼中の拍子や雉子の声

さまざまの事おもひ出す桜かな

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声

蛇くふと聞はおそろし雉子の声

雀子と声鳴かはす鼠の巣

蝶の飛はかり野中の日かけ哉

起よ起よ我友にせんぬる胡蝶

古池や蛙飛こむ水の音

這出よかひやか下のひきの声　奥細道

二股にわかれ初けり鹿の角

旧友に京にて逢て

此句尾張清見か遠方より吹て五月の...

森の角先一ゆらし乃[illegible]

雪[illegible]

猫の妻竈の崩より通ひけり

麦めしにやつるる恋か猫の妻

猫の恋やむとき閨の朧月

○熱田[illegible]に 何とはなしに何やらゆかし菫草 翁

○山路来て何やらゆかし菫草

悼 呂丸 羽州羽黒山麓手向町ノ誹士 京ニテ没ス

当帰よりあはれは塚の菫草

古畑や薺摘ゆく男ども

[illegible]

○いろいろの名もまぎらはし春の草 珍碩

木の[illegible]情[illegible]

[illegible]

菩提山

山寺のかなしさ告げよ野老掘

[illegible]

[illegible]

笈の小文[illegible]

[illegible]

大和行脚の時

草臥て宿かる頃や藤の花

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時

ほろほろと山吹散るか滝の音

慈恩春色今朝尽
尽日徘徊倚寺門
惆悵春帰留不得
紫藤花下漸黄昏
三月三十日題慈恩寺 白楽天

山吹の露菜の花のかこち顔なるや

望湖水惜春

行春をあふミの人とおしミける

千住驛

前途三千里のおもひ胸にふさかりて
幻のちまたに離別の
なみたをそゝく

元禄二年弥生七日

奥の細

行春や鳥啼魚の目ハなみた

行春にわかの浦にて追付たり

二月十七日神路山を出るとて

はたかにはまた衣更着の嵐かな

子を喰くと中人ふまれし猫の恋
当らぬ蓋ののちまてられしも
御製の尊きを今も猶
敷島にて聞ふ民も庵竈

莫太句解ニ山雞集
おかしくハ蛎ともさして
干も見へき蛤かくハ名も
仮あり

追加
句選彫刻ゟ後見聞の句ゟ
拾ふて追加の例とす

光慵

蛎もるまる海苔掻にも壱ばい甘て
あろ二四又價もあれハ服を返
生白ハ随分にて名を高
蛤なても婦く今日の蝶ゟ生よ居て替

鶴の巣もみつらめハ花ゟ果て越るに
阿蘭陀も三花とすきかひのなき鞍
草嶺ゟ尻打て梅かん山椒

富士小行人しかれ家よ出川

落さ海小水に成しありし也　抜

影掛

笠ちからとらぬ岩も春の色　奉納

夏之部

御手洗川狂ひ波又かしこ衣かへ

日光にて

奥之細道

行くさると青葉若葉の日の光

青葉して御目の雫拭はゞや　招提寺

笈の小文又鹿島紀行にも
とあり
行く春集又記に
暮の春とありと行

山路にて

夜まゆるもなきこひの鉢たき　挑燈

藪横門まで蓮の花ちらす

芭蕉翁画讃

蓮さへ葉も萎しゝも仏の家

逢龍尚舎

笈の小文芦の若葉
荻としるす

物の名を先とふ芦の若葉哉

藤の実は誹諧にせん花の跡

小文庫
仏頂禅師の庵をたゝく
奥ノ細道

木啄も庵はやふらす夏木立 形須

雲岸寺奥にて
仏頂
竪横の五尺にたらぬ草の庵むすふもくやし雨なかりせは

須磨の浦一見の時

須磨寺やふかぬ笛きく木下闇

幻住庵にて

先たのむ椎の木も有夏木立

杜若かたるも旅のひとつ哉

山崎宗鑑の旧跡

熱田三歌仙ニ子なし

ありかたき姿拝まんかきつはた

ふたゝひ桐葉子か許にありて
今やあつまに下らんとするとき

牡丹蘂ふかく分出る蜂の名残哉

桃隣新宅自画自賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

卯の花も母なき宿そ冷しき

円覚寺大顚和尚ことし睦月
はしめ遷化し給ふよし

梅恋て卯花拝む涙哉

[illegible]

奈良にて

灌仏の日に生れ逢ふ鹿の子哉

日は花や暮てさびしやあすならふ

館代より送りける馬の口付のおのこ短冊乞けれハ　おくの細道

野を横に馬引むけよ郭公

烏賊売の声まきらはし杜宇

木かくれて茶摘も聞やほとゝきす

須磨の海士の矢先に鳴や杜鵑

作払集ニ京ニ居て京なつかしとある

京にても京なつかしやほとゝきす

華実ニ此句両評あり考へし

深川

一声の江に横ふやほとゝきす

ほとゝきす声横ふや水の上

句解　郭公柴の戸に啼ハ梅も[illegible]

郭公正月は梅の花咲り

清く聞ん耳に香焼て郭公

おもひ立木曽や四月の桜狩

荷兮餞別閑居

子規大竹藪をもる月夜

小文庫ニ　明石　時鳥ト　あり　明石

ほとゝきす消行方や嶋一ツ

ほとゝきす鳴々飛そいそかはし

句解　時鳥鳴や五月の菖艸　あやめも知らぬ恋もするかな

郭公鳴や五尺の菖艸

不卜一周忌琴風興行

十文執筆

おもく見ゆ峰の春迄吉野硯筥

うき我を淋しからせよかんこ鳥

とんぼうとゆふかほや雨乃花菖蒲

落栫舎

閑居

柚の花よむかし我思ふ料理間

海士が家ねくらふるもかしの宿

贈杜國子

白芥子に羽もく蝶の形見哉

稲田の蛍見

あふくもの也夜もしれ辞て蛍來ね

愚に暗く茨を掴む蛍かな

草の葉を落るより飛ふ蛍哉

己か火を木々に蛍や花の宿

我か庵は坂の下なる雅茶哉

小文庫にちとてくる

こ持にはえひかはるいなか

きの事なるや

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

うき人の旅にもならへ木曽の蠅

日既暮れければ封人の家を

見かけて舎をもとむ 三日風雨

為辨云白氏文集老鶯ノ文字ニヨルヘし

奥細道

[illegible]ことを登[illegible]

かれてより[illegible]山中[illegible]

[illegible]竹の子[illegible]

昼竹自讃

行睡目

[illegible]植る日[illegible]蓑と笠

小文庫にあるなり

奥細道

奥州[illegible]川へ出る

[illegible]

[illegible]摺の石を尋て

さなへとる手もとや昔しのふ摺

後[illegible]入集すれとも
伊丹の句[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]なかるゝ[illegible]

清水なかるゝ柳芦野の里に

ありて田の畦に残る

おくの細道

田一枚うへて立さる柳かな

白川

同

風流のはしめや奥の田うゑうた

須か川等窮亭興行

名護屋て

世を旅に代かく小田の行戻り

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

さみたれや蚕わつらふ桑の畑

髪生て容顔蒼し五月雨

為辨云白氏文集ノ老鶯病蚕ト云文字ヲ取テ云於タル由也熟語ヲ知ラヌ人ハ得キクマシト但シ庭ト云字ヲ入テ聞ヘシトアリ

さみだれに鳰の浮巣を見にゆかん

大井川にて隅田塚章式の
けんに帰りて

五月雨の空吹おとせ大井川

仏人堂前にて立よりかゝりて
舟いたやし

おくの細道

五月雨をあつめて早し最上川

経堂は三将の像を残し光堂
三代の棺を納め三尊の仏を
安置す

おくの細みち

さみだれの降のこしてや光堂

洒落堂額破

泊船集ニ高館ニ登ト
題して出せしもあれ
しく

夏草や兵どもが夢の跡

奥細道

藤中将実方の塚尋ねて

笠島はいづこ五月のぬかり道

箱根の関越て

目にかゝる時やことさら五月富士

奥細道

義経の太刀弁慶が笈をとゞめて
什物とす

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

瀬上ノ宿ヨリ一里半斗佐藤庄司
旧跡丸山ト云所

松しま塩かまの所〻画に書て
送る且紺の染緒つけたる艸鞋
二足餞すされはこそ風流のしれ
もの爰に至りて其実を顕す

おくの細道

菖蒲艸足にむすはん草鞋の緒

稼ゆふ所手にほこらむ　窮髪

正成像鉄肝石心此人之情

なてしこにかゝる涙や楠か露

國破れて山河あり城春にして
草青みたりと笠うち敷て時の
うつるまて泪を落し侍りぬ

高館

奥細道

夏草や兵ともか夢の跡

殺生石

石の香や夏草赤く露暑し

尾花沢にて

行すゑは誰か肌ふれん紅の花

おくの細道

眉掃を俤にして紅粉の花

己百亭

宿りせん藜の杖になる日まて

もろき人にたとへむ花も夏野哉

陸奥にくたらんとして下野の

忠まく旅立けるに使みちの奥
といふ所に庵結び住ける
者有て深く交りをなし今
かく居もまたふかく思ひはかりけれ

眼
まつさき慶紀子とこ白を椎の葉　翠桃

秋風の人拾枝折に夜迷ふ
人ゝ川さくもまちかねて勝分
結白にふみの文し
穂の穂我おもひ茶ふ
甲斐の国に茶立して
行脚なる麦しく麦やきね

伊勢の出蛭か小浪の菜門去屋
結秋しるま郷し涼
しるな哉啼て花抜乃居
涼しきと尾強の出崎て
涼我志らひあり居れ
いさしるま穂麦ろつん艸 梲
まはしも菜勝の穂よ出つらん
菖かまつこまも菜まつしも花汁

重行亭

絶つらしや山を出排しる初茄子

夜[illegible]かけとのひらん[illegible]は

宗祇の[illegible]に白[illegible]

夜の[illegible]は[illegible]せん[illegible]

[illegible]花[illegible]蝶[illegible]酒

[illegible]

あら[illegible]薮を小庭の[illegible]座敷

おくの細道

象潟や雨に西施かねふの花

松嶋ハ笑ふか如く象潟ハうらむかごとし

許六か木曽路に赴く時

旅人の心にも似よ椎の花

[illegible]の末まで

西湖　東坡

水光瀲灩晴偏好
山色朦朧雨亦奇
若把西湖比西子
淡粧濃抹両相宜

西方浄土に便ありと行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用給ふとかや

おくの細道　白川碑

世の人の見付ぬ花や軒の栗

須賀川の等窮か[illegible]

しばらく[illegible]

水鶏鳴と人のいへばや佐屋泊

大津湖仙亭

此宿は水鶏も知らぬ扉かな

[illegible]の森

撞鐘もひゞくやうなり蝉の声

山形領に立石寺と云山寺
あり佳景寂寞として
心すミ行のミ

奥之細道

閑さや岩にしミ入蝉の声

塩竈亦しろ寺紀の像に
僧
[illegible]庭もて何か人の背中つき

明石夜泊
蛸壺やはかなき夢を夏の月

夏の月御油より出て赤坂や

大井川波に塵なし夏の月

月はあれど留主のやう也須磨の夏

小文庫ニ曰ク
陸奥千しまの法縁也
波に塵形しと何る
笈の小文に留主の様也
泊船集に月見ても
ものたらはすや須磨の夏と有

おくの細道

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峰いくつ崩て月の山

湖や暑さをおしむ雲の峰

六月や峯に雲おくあらし山

清滝や風[illegible]の[illegible]撫子

丈山の像

風薫る羽織は襟もつくろはず

類柑子 瓜のかさ略文

宗鑑卅六の句碑松陵老人の方へ訪たるに床に無絃の琵琶居て古き書籍を零しおりし破たる瓜の蔓を拾て茅も蔓も清らと借居ゑて扇と苔る

○蘭瓜や絃となしたる琵琶の上 言水

○[illegible]瓜の[illegible]進らおやまりて[illegible] 其角

小倉山

李杉[illegible]也[illegible]七無[illegible]る音

瓜のつる[illegible]

類柑子 幻住庵[illegible]

夕[illegible]

[illegible]瓜の[illegible]

[illegible]

柳[illegible]

[illegible]

瓜の[illegible] 蓮[illegible]

山[illegible]

伯和集 瓜の土と詞書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夕[illegible]

[illegible]

夕[illegible]

岐阜にて

[illegible]

[illegible]

おもふ侍るに幕掛て以さきあひ

ゆきかへり人に稲の葉の末かな　小

蘆残るしらぬ葉を盛て

海こえて鮎の上る江の川の鮎鮓

あつくさし　小ねぎの上の鏡の脇

杯に泥な落しそむら燕

鎌倉を生て出けん初鰹

あら何ともなや鯛の焼鯵鯨

蓮の香を目にかよはすや面の鼻

涼しさを海へ入れたりもかみ川　奥細道

あつき日を海にいれたり最上川

那須温泉

湯をむすぶ誓も同じ石清水　社市氏神八幡宮也

岐阜山

城あとや古井の清水先とはん

清瀧の水汲ませてやところてん

異ニ清瀧やところてん

其人のまへに小袖を今也立国一千

晋

測吃をうつやむ

宗祇文書に菫草

野明亭

涼しさを絵にうつしけり嵯峨の竹

おくの細みち

さゝれ波ものゝ三日月は猶の兄

出羽尾花沢清風宅ニテ吟之

奥細道

涼しさを我宿にしてねまる也　はせを

野水新宅

涼しさを飛騨のたくみか指図かな

[illegible]

涼しさを絵にうつしけり嵯峨の竹

涼しさや直に野松の枝の形

仁二日不足也
切レけり

奥細道

涼しさやほの三か月の羽黒山

汐越杢

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

小本集
象潟の桜は波にうもれて
花の上こく蜑の釣舟

西行桜　象潟

夕晴や桜に涼む波の華

[illegible]

川中の根木によりそふ涼み哉

唐破風の入日や薄き夕涼

川風や薄柿着たる夕涼

飯あふぐ嚊が馳走や夕涼

破風口に日影やよはる夕涼

奥細道

酒田の湊より下る淵庵不玉（淵庵不玉）
といふ醫師の許を宿とす

あつみ山や吹浦かけて夕涼

木節亭

武隈の松みせ申せ遅桜と
挙白と云者餞別したりけれハ

加文
卯月の初庵に帰りて
旅の疲れとかくを休よ

修験光明寺と云有
ここに招かれて行者堂を
ねんそ

羽黒山

奥細道
奥ノ細道
日
月

秋ちかき心の寄や四畳半
行や我しら命ある蝉衣
夜の秋や西に明しゆう物
桜より松の二木を三月越
夜衣ハまつ風をとりつくさき
夏山に足駄を拝む首途哉
那須黒羽根
有かたや雪をかほらす南谷
語られぬ湯殿にぬらす袂かな

追加

亜子ノ母追善
卯の花も母なき宿そ冷しき

甲斐山中
山賊のおとかひ閉る葎かな
[illegible]
白芥子や時雨の花の咲つらん
杜宇なく〳〵飛そいそかはし
[illegible]

夕顔にかんなれて撥遊ひけり

奥細道

千鳥掛

日

あつく八儀能や婁の初

名月しも笋や桃きん僕しむ　さし掻画なく宿十

杜若いきを発句のあいけり

元禄六年七月七夜風雨天にくもり河浪も岸をひたして烏鵲橋柱を流し一葉梶を吹折気色二星も面影を失ひ思ひしと昔日小町もさんも歌多りし一銚かけ添る折田し遍照小町か歌と咏せる人の是十首て卅二字と探て句果しと分きりんと

高水に星も旅寝や岩の上

七夕牛しかりのかさらまし　結合羽

（石の上ニ旅寝をすれハいとさむし苔の衣をわれにかさなん　小町）

（世をそむく苔の衣ハたゞ一重かさねハうとしいさ二人ねん　遍照）

越中国一ぶりの関

泊船集ニ此句

みえのとも　杉風

奥細道

日

秌之部

初秋や海も青田の一みとり

七夕や秋をさたむるはしめの夜

たなはたにのこしおもしハ絹合羽

奥細道

文月や六日も常の夜ニハ似す

あら海や佐渡に横ふ天の川

合歓の木の葉越もいとへ星の影

高水に星も旅寝や岩の上

金沢北枝とへかかりし

りうちうにて此夏をあそひし

奥細道

まゐる今[illegible]
其[illegible]
稲妻や闇の方行五位の聲

越前境吉崎入江

以[illegible]
稲つまにさとらぬ人の貴さよ
[illegible]稲妻を[illegible]

此処汐越松アリ

本間主馬か宅に骸骨ともの
笛鼓をかまへて能する所を
画きて舞台の壁に掛たり
まことに生前のたはふれなと
かはこの遊ひに異ならんや かの髑髏を枕として終に夢うつゝを
わかたさるも只生前にしめさるゝものなり
稲妻やかほのところか薄の穂
加賀の国を過とて
熊坂かゆかりやいつの玉祭
玉祭けふも焼場のけふり哉
尼寿貞か身まかりけると聞て
数ならぬ身となおもひそ玉祭
甲戌の夏大津に侍しを

兄曾良我ニ 白雪作
芭蕉翁杖銭ヨアリ
如此ニモ号タルカ

ちのみなれは息せり
まされは田畠にかへりて貧
人我いとふにむなしくて
家には杖の声髪猶蓬ま
むかし櫛文度さへ古樸板
あるひは錢を帯て伝勧化を施せ
不思又何れは先立て行て
私て有なき錢を蔵の家と
云事はまて行きてうちつけて
きりくと双息のうちなれは

加州山中温泉ニテ
きのふは海のみかたとしに今も
まうし
いさり火にかしかや波の下むせひ

画讃
西行の草鞋もかゝれ松の露
西上人の草の庵の跡は奥の
院より右の方二町ほど分入
て柴人のかよふ道のみ
かのとくとくの清水は今もとくとくと
雫落る

みそかくしきみにも世中なりけり

二見の浦にて

硯かと拾ふやくぼき石の露

関越る日より雨降る陰も

隠れまでて

常しられぬ画士挿も始日にれまるさま

虚栗 和角ノ蓼螢ノ句ニト云前文アリ
同集 草ノ戸ニ我ハ蓼喰フ蛍かな 其角

朝顔に我はめしくふおとこかな

蕣ハ酒盛しらぬさかりかな

閉関 小文庫ニ前文あり

あさかほや昼ハ錠おろす門の垣

嵐雪か絵出しけり賛のぞまれ

蕣ハ下手のかくさへあはれなり

二上山当麻寺に詣て庭上の

松を見るに凡千とせも経たる

ならん大いさ非情といへとも仏縁に

ひかれて斧斤の罪をまぬかれ

たるぞ幸にしてたつとし

類柑子ニ自画讃

僧朝顔幾死かへる法の松

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉

萩原や一夜はやどせ山の犬

加賀の小松にて

濡れて行人もをかしや雨の萩

小萩ちれますほの小貝小盃

素堂が母七十七としの

秋七月七日なれば和万葉

七種を以て題とし俳諧につらね

予は七人の詩歌を請ひて四季の

名又七字のまくらにあらす

七株の萩のちもとや星の秋

おくれ細道

浪の間や小貝にまじる萩の塵

八月十六日空晴たれば小貝ひろはんと種の浜に舟を走す 敦賀より海上七里

おくの細道

越中国一ぶりの関にて

一家に遊女もねたり萩と月

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

おくの細道

云よ從て松露(?)にしも枝を折下

玉川の水におぼれそ女郎花

たき盥にて西施がうつくしき

此にも帆上る風待ちておりたれ

いに從てまゐりて

落けしと見えたり

秋とも思ひし

此句翁の製ならず

とがめて入れし

実なし八六にて

泊船集にも

守栄院

泊船集に葉に

門に入ればそてつに蘭のにほひかな

蘭の匂ひかと

あり

てうといふ遊女ありける発句

ちりしいて雪ま結出しやなぎかな

董村

発日記美人図に題する

蘭は香也蝶の住まさに薫後
艸以ふくおもく花の手枕かな
鶯泣無雁は来る時引ありし
昔西は雲は夢は芙蓉乃しる事か

画讃

枝かすは月にくるまるる芙蓉かな

越後の国寺田何しるせり人

葉園は山つれの花は艸由しる

後醍醐帝は御陵を拝み
御廟も鎮て無ふる須は山は石ふる事
花は桜も実も紫くもも見ぬ所ふ
すくてとみ花へも雉は唐かな

業名菴

昔は花をも手向七種蓑に唐らし
花の葉は木槿まつるに除れ引刺

花木槿ちらしちるおくへのかさしかな

賀州大聖寺
蓮昌寺庭中は柳ちれハ

庭掃て出るや寺ふ手向一奔

ちくの柳庄

盆過て宵寒くなりし虫の声
床に来て鼾に入るやきりぎりす
白髪ぬく枕の下やきりぎりす

太田の神社に真盛か甲錦の切あり樋口の二郎か使せし事のいつゝ縁起にみえたり

奥細道

むざんやな甲の下のきりぎりす
義仲の寝覚の山か月悲し
海士の家は小海老にまじるいとゞ哉
蜻蛉やとりつきかねし草の上

小文庫に
鷹の目といさむく

那古と云処より加賀の国に入

小蝶にもならで秋ふる菜虫哉
庵の名はあるじもしらず四十雀
外法也子稲かくしや野雀
柏の木より鶉屏あるる野の風
鸚鵡は国の今や草葉に鳴つゝ
稲雀茶の木畠や逃所
云以嘯尻あたり寒し夜の床
棧也先かれひ出るあらし

奥の細道

稲の香や分入右は有磯海

讃拌子ニ早稲トアリ

粟稗にとほしくもあらず草の庵

芭蕉ハまつことなくて世をわたる谷哉

堅田にて

病雁の夜寒に落て旅寝哉

蕉窓文草にあり

名月の花かと見えて綿畠

又さし出とあり

名月や門へ（にイ）さしくる潮かしら

名月や池をめくりて夜もすから

秋の月此池の水海にもせよ 家隆

八月十四日夕暮敦賀の津に泊る十五夜月待に賑ひ翌夜も斯くの有やと云へハ主曰北陸の習ひ猶明夜の陰晴はかりかたしとて

おくの細道

名月や北国日和定なき

名月や座に美しき顔もなし

名月は二つ過ても瀬田の月

夜ひそかに名月見するすゝみかな

三井寺の門たゝかはやけふの月

たゝつゝの雄よし野の月も十六里

米くるゝ友を今宵の月の客

雲おり〳〵人をやすむる月見かな

寺に寝て誠顔なる月見かな

月見せよ玉江の芦をからぬ先

座頭かと人に見られて月見哉

泊船集にかへりけ

雲おり〳〵なとあり

十六夜はわつかに闇のはしめかな

いさよひもまた更科の郡かな

うち出の濱まて

十六夜や海老煮るほとの宵の闇

いさよひのいつまて今朝に残る菊

あくる日出ていさよふ月に[illegible]

木曽の痩もまた直らぬに後の月

信よしにて

[illegible]

三日月や蕣の夕へつほむらん

三日月に地はおほろなり蕎麦の花

類柑子

何事の見たてにも似す三かの月

嵐蘭初七日詣墓

見しやその七日は墓の三日の月

堂塔へ[illegible]舟中にて

明ぼのや[illegible]

深川の末五本松といふ所に船をさして

川上とこの川下や月の友

浅草の[illegible]

うつくしや[illegible]

京一条ゆきゝ川のもる

下なる里

おきあかつや月見に旅の野となれ

山寺へ心の風や秋の月

侘や蝶ぬるゝ住月夜

小文庫にありハイニ

同

鎖明て月さし入よ浮御堂

海尾

月に名をつゝみかねてやいもの神

元禄二年敦賀の湊に月をみて

気比の明神に夜参

遊行上人の古例をきゝ

細道

まつこの

月清し遊行のもてる砂の上

伊勢国又玄宅ニテ文アリ

萩の戸の月やそのまゝ[illegible]

悼遠流の天宥法印

その玉や羽黒にかへす法の月

ゑの角の四角な影を宗鑑[illegible]

月さびよ明智が妻のはなしせん

秋もはやばらつく雨に月の形

燧山

義仲の寝覚の山か月かなし

文坡睦北亭月下ニ遣思

月澄や狐こはがる児の供

東順身まかりし時
伊丈にゆるを悼みて
御新集に月の句
とりあへず

入月の跡は机の四隅かな

こゝろや膝に手枕たく雲の宿

月のこゝろふおのれ檜の皮あり

戸拂あけて見れば西に山あり
伊吹山といふ花にもよらず雪にもよらず
只是孤山の懐あり

其まゝふ月もたのまじ伊吹山

行あかりし
御新集久九月七
日かなしきとあ
帰る旅宿

見る影やまだ片なりも宵月夜

九たび起ても月の七つかな

侘て住月侘斎が奈良茶歌

河中に若き
橋桁がすゑの月好名残

善光寺

月影や四門四宗も唯一つ

廿日余りの月かすかに見えて山の
根ぎはいとくらきに馬上に鞭をたれて
数里いまだ鶏鳴ならず杜牧
が早行の残夢小夜の中山にいたりて
忽驚く

馬に寝て残夢月遠し茶の烟

續猿蓑 二

公羽か句之

さて咲とかきま

ところ野まで

佑ゝ川て我よ咲きまで抛りて嘉

出羽の山よ起て陸奥けさうはと

るさく

又なるも谷は分明らし山本

まうやく咲九月も近し葉はた

たゝ咲こる峠まて

葉の香ふくれはまかるる芦白ふ

艸しけき戸也日は暮てかれ葉はら

打かゝる露よかゝる葉はさきかな

秋冬もせむ声の庵の留守の菊

稲妻の又の嬉しれて葉の色

艸菴はる

起ゝ何ら折葉あのさかる水の流

木因 亭

像見や月と葉と山田三反

園女 亭

青くて葉は月ふ立てさかる塵堂

葉の落咲也石原はらの肩

秋桜蝶もあかり也茶屋の縁

蝶も集てとすゝ菊の跡和ふ

素堂菜園之句
続猿蓑

菊の後大根の外更になし

菊の香や庭に切たる履の底

菊に出て奈良と難波は宵月夜

菊の香やならは幾代の男ぶり

菊の香やならは古き仏達

いさよひのいつれか今朝に残る菊

加賀山中

山中温泉にて

おくの細道

山中や菊はたをらぬ湯の匂

渡[illegible]菊の[illegible]

[illegible]四五本の[illegible]

桟や命をからむ蔦かつら

[illegible]

小文庫モ同断

猿蓑ニハまた日数へぬ秋の露とあるを考へし

初茸やまた日数へぬ秋の露

松茸やしらぬ木の葉のへはりつき

如水別墅

籠居て木の実草の実拾はゝや

[illegible]

[illegible]世の人の[illegible]

山[illegible]

続猿蓑[illegible]

小文庫ニ秋風の吹けとも青し栗のいか

秋風の吹けとも青し栗のいか

不破

秋風や藪も畠も不破の関

悼松倉嵐蘭

秋風に折て悲しき桑乃杖

加賀山中桃夭と名つけて

桃の木の其葉ちらすな秋の風

牛を屋と坂の露よいし桜は世

富出士川の身ち銭ちりと立川鈴ちる

桂子枝衣に泣あるま

今日物かきて扇ひきさく

曾良句

[illegible]の小堂[illegible]の上を造[illegible]

○

奥細道

猪もまて人に吹るゝ秋の風

賀州 全昌寺といふ寺に泊る

前の夜[illegible]書[illegible]

終夜秋風聞やうらの山

おくの細道

道中吟

あかあかと日はつれなくも秋の風

[illegible]是日[illegible]句[illegible]

賀州小松那谷観音堂

石山の石より白し秋の風

多[illegible]にして又松高し秋の風

加州一笑墓ニ詣

おくの細道

塚も動け我泣声は秋の風

一笑[illegible]

西東あはれも同し秋の風

伊勢[illegible]に云[illegible]

似る秋風とも云ハまじの所
似ぬけりん我もなく

義朝の心ニ似たり秋の風

貞享甲子秋八月江上の破屋
を出る程風の声そゞろ寒けなり

野ざらしを心に風のしむ身哉

猪もともに吹るゝ野分哉

吹とばす石ハ浅間の野分哉

秋寒も誰拍し波の行さる

乳麪の下たきたつる夜寒哉

車庸亭

面白き秋の朝寝や亭主ぶり

秋の夜を打崩したる咄かな

むさし野を出る時野ざらしを
心におもひて旅立けれハ

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮

枯枝ニからすのとまりけり秋の暮

あちこちや我も淋しき秋の暮

人の短をいふ事なかれ己か
長をとく事なかれ

物いへは唇寒し秋の風

此道や行人なしに秋の暮

人声や此道かへる秋のくれ

鳴海知足亭

よき家や雀よろこぶ背戸の秋（粟）
賀新宅　削

イニ濱とも[illegible]
[illegible]集ニ[illegible]
いろの濱まくらと
[illegible]

奥細道

いろの[illegible]
敦賀ヨリ海上七里程の濱

さびしさや須磨にかちたる浦（濱）の秋

見渡せは詠れは見れは須磨の秋

松か[illegible]秋

秋十とせ却て江戸をさす古郷

[illegible]

此秋は何て年よる雲に鳥

大坂芝柏興行

秋深き隣は何をする人そ

女木沢桐奚興行

秋に添て行はや末は小松川

長月[illegible]母[illegible]
志らかおかめよと浦島か子か
玉手箱汝か眉もやゝ老たり
としはらく泣て

手にとらは消ん涙そあつき秋の霜

捨らるゝ秋扇なからも暑乃哉

おくの細道
秋涼し手毎にむけや瓜茄子
加州北枝
小松艸庵にいさなはれて

冬瓜やたかひにかはる顔の形

懐老杜

髭風ヲ吹て暮秋歎スルハ誰か子そ

大坂清水茶店四郎左衛門にて

松風や軒をめくりて秋くれぬ

紅蝶の樹下のもの也　青蘿

此秋も多年の刈すゝき三本　蝉とん

對　伊陽門人

行秋も手拭るなかくる葉のいろ

菊かおる雲林に蕉で指ゝへぬこころか

西行谷のふもとに流ありをんなともの
芋あらふを見て

芋あらふ女西行ならは哥よまん

雲津の番にて踏墨の心を

元やくと甕をふまへて豊作を

大和の國に行脚して葛下の郡
竹の内といふ所は此ちりか旧里
なれは日比とゝまりて足を休む

足掛侍む藪よりま奥又家あり

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

外宮に詣侍りけるに峯の松風

身にしむばかり深き心を起して

晦日月なし千世の杉を抱く嵐

多とりに清ふ諸杉あり無縁迠家

追加

たゝしも新搗はし萩は雨ふる

秋海棠西瓜乃色に咲にけり

借て住む月寝家に宿もや宿

かゝま史ふうしも流乃下也せり

松茸やかぶれた程は松の形

此寺は庭一盃のばせを哉

[illegible]し夫撲取草の花の露

蓮池や折らで其まゝ霊祭

奥細道

猿蓑ハあの小袖乃きれはし節
給のかゝ天手もれ秋也
かくさぬぞ宿ハ菜汁に唐がらし

削掛

はつ秋や海と青田の一みどり

削掛ニ お文
ちぬはたへくといふ初の庵の
宿ハられさしも袖をたな
れとまし小さもの旅人

猿蓑集ニ一尾根ハ
とあり

冬之部

初時雨猿も小蓑をほしげ也
けふばかり人もとしよれ初時雨
旅人と我名よばれん初時雨
ゐるすまで志ばし時雨ぬ大井川
山城へ井手の駕かる志ぐれ哉
一尾根ハ志ぐるゝ雲か富士の雪
時雨るゝや田のあらかぶの黒む程

元禄三年の冬粟津の庵
より武江に赴くとて島田の

帰縁寺に泊りて

宿して名残ぬのある時雨哉

イニ　おろかてと帰り

艸枕犬もしぐるか夜乃こゑ

金屏の松はふるびぬ冬籠

イニ　金屏風とも帰

小文庫に　松もゆかさよ

千川亭

折々よ伊吹をみてや冬こもり

贈海堂

難波津や田にしのふたも冬籠

冬こもり又よりそはん此はしら

志かく隠遁居なる人に申遣

あし　祝

先祝へ梅を心の冬こもり

三州菅沼亭

京に倦て此木からしや冬住居

木枯に匂ひやつけし帰花

こからしに岩吹とかる杉間哉

木からしや頬腫いたむ人の顔

こがらしの身は竹斎に似る哉

笠を長途の雨にほころばせ紙衣ハとまりの嵐にもめて侘つくしたる侘人我さへあはれにおぼえける昔狂歌の才士此国にたどりし事を不図思ひ出て申侍る

冬の日

冬の日　狂句と　二字を入へて帰

冬枯は様よに似ることの風

留守のまに荒たる神の落葉哉

ためつけて雪見にまかる

麦の紅よあくの
桂記とみえり

文人よ我が名を世にあらは川

明照寺にて

百年の気色を庭の落葉かな

ためしく

あさ露に酒や濁るや菊の露

三尺の山も嵐の木の葉かな

菊の香の枯れてたふれし[illegible]

まとうもいひて[illegible]論へし[illegible]

武江の秋大橋なし
出てうかし時は
以前あり[illegible]

菱川[illegible]
[illegible]
逢坂[illegible]
宗の庵と[illegible]

人の菴を尋ねて

いはぬ[illegible]の[illegible]

山海経ニ曰南陽府豊山ニ有九鐘ニ霜降則自鳴
此意ヲ以師ノ
高砂の尾上の鐘の音すなり
暁かけて霜やおくらん
豊ト食ト云麦タルハイカヒ之

病中

菊の香や[illegible]の海[illegible]

金屛山[illegible]峰[illegible]

[illegible]山仙や[illegible]障子の[illegible]

[illegible]白の木地より又白し水仙花

[illegible]や粉糠の[illegible]白の端

信濃路[illegible]

[illegible]の外[illegible]

[illegible]の枯尾花

素名本通寺にて

冬枯のころは虚もかれぬもの原
きのふこそ離れて侍りしかりの露
家族茶を詠て
花に植し夜をさる鳥の音
炭俵に大根引といふ題にて
小坊主に乗るとありて むかしもかゝる事
藪つまれよ小坊主乗る也大根引
旅にて病て夢は枯野をかけ廻る
鳥なくし我を絵と見るかな雅哉
近江にて膳所の田井と云
芹焼や裾わの田井の初氷
曠野に 茅舎買水といふ題
氷苦く偃鼠が咽をうるほせり
芭蕉が越南の心をいへる集の

題しらず
一 露もさむし世に葉枯氷の姫
槽の雫波をも凍て待氷夜也潤
詩 杜牧紀行
茂のふ文は冬の是と上にありしなりけり
すゞしき旅なる上に氷る翁なし
いつもかれる水あれの標本立
雑炊に経をとく朝の俤哉
祖父もやみし仏の花を拾ひける
仁たはむれをとかり
さ川まで也文佛待らうて
新宮掛けらるる柳の上

釈恵崇詩
笠重呉天雪　鞋香楚地花
他年訪禅室　寧憚路岐賒

[illegible]

[illegible]

初雪や幸庵にまかりある

京まではまだ半空や雪の雲

箱根越す人もあるらし今朝の雪

二人見し雪は今年も降けるか

我[illegible]雪を思ひけん

[illegible]自画讃

庭掃て雪をわするゝ[illegible]哉

酒のめはいとゝねられぬ夜の雪

いさ行む雪見にころふ所まで

[illegible]

[illegible]

市人よ此笠うらう雪の笠

對友人

君火をたけよき物見せん雪丸け

日ころにくき烏も雪の朝哉

ためつけて雪見にまかる紙子哉

雪[illegible]住居哉

[illegible]

[illegible]

雪の[illegible]二十[illegible]

此句尾州[illegible]中[illegible]人をあつめられしとき

雪と雪こよひ師走の名月か

小文庫ニ春部入　かゝりとかゝえしおく

熱田二分也
尾張国熱田より[illegible]
[illegible]

[illegible]之上に[illegible]世に[illegible]
[illegible]

二月堂に籠りて　水取は若狭の井と[illegible]

水とりや氷の僧の沓の音

海くれて鴨の声ほのかに白し

[illegible]を[illegible]にて鳴海

星崎の闇を見よとや啼千鳥

[illegible]て[illegible]鴨の足(?)

葱白くあらひたてたる寒さかな

風(?)来まて

[illegible]

夜[illegible]の[illegible]家をかな

旅宿

こゝを[illegible]手拭あふる[illegible]

越人と吉田の駅にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店

粕(?)[illegible]や[illegible]

支梁亭

口切に堺の庭ぞなつかしき

貞徳翁の染筆に讃して

小文庫に 〔[illegible]〕とあり 但し形の字なし

さればこそ[illegible]の丸臣中

文通菴の主人國士芳名を崇

[illegible]に[illegible]

を数月[illegible]

冬初冬一夜の宿を[illegible]

[illegible]

形見[illegible]

[illegible]枯木の枝の長

[illegible]の[illegible]酒[illegible]

[illegible]世[illegible]

[illegible]

水[illegible]夜越

[illegible]深川の旧草より出て

都出て神も旅寝の日数哉

何に此師走の市にゆく烏

熱田にて

貞享初年桑名に旅ひて熱田に至る

あそび来ぬ鰒釣かねて七里迄

埋火や壁には客の影法し

ともかくもならでや雪の[illegible] 此亭にて

[illegible]世我[illegible]のひく

鳴海寂卒氏 鉅治光
竟する
氏も小姫いて手にて福くるへ

家の後ゑてしは咲る大樟かな

住つる無旗のさいゐや盃大燵

西吹し雪まさるらん冬の西

雁さりて寡の田面の雲かな

月花の赤く針かきそん室の入

のこる膳も宮の渡しの中

長嘯は掾をめくれは袜て紀

絶ゑさ家ある雪まて袜さ哉

芭蕉は寿を護はわらふ出立かな

万寿はの菓をは隠る師走哉

小文庫に煤掃を詠あり

煤はきや七ツは宿のさる餅

まもれ立松の一木の煤はらひ

煤はきは誰か棚はる大工かな

旅寝して見しや浮世の煤はらひ

對門人の僧

さまも世は煤まる海の古梅子

月の名も師走立子路を訪ふ

うかれたる師走は海見る鴨

細輪らの師走の市を行うくさ

年の市線香買を出かけかな

前文の笠を張てとあるは是れ八[illegible]と云も縁語あり

行卅江上とあり
月代也と云り

としのくれも三十日に近し鉢の音

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我は年忘

[illegible]

[illegible]の年の瀬あらん

異にも見ゆなれども枕風所持の類天二よる物中にあり

みづから雨の侘笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどりかな

[illegible]侘也自画あり

小町画讃

たふとさや雪ふらぬ日も蓑と笠

熱田御造営

とぎなほす鏡も清し雪の花

熱田三歌仙に。雪の花

[illegible]草鞋[illegible]杖を

旅寝ありて年も暮ければ

年暮ぬ笠きて草鞋はきながら

[illegible]

[illegible]人の[illegible]書

[illegible]の[illegible]の名

盗人に逢ふたる夜もあり年の暮

。おく文
我此賢人にも古郷は雑出るとぞ

分別の底たゝきけり年の暮

魚鳥の心はしらす年わすれ

蛤のいけるかひあれ年の暮

月雪とのさはりけらし年の暮

山家にとし越て

誰か聟そ歯朶に餅おふ年の暮

追加

わすれ草菜飯に摘ん年の暮

志賀の浦の船の雑煮を祝つきて

杜国か不幸をいふて読る哀

鷹の声枝折ふし聞て

夢よりも現の鷹そ頼母しき

米かひに雪の袋や投頭巾

雪の中は昼顔かれぬ日影哉

香を探る梅に蔵見る軒端哉

折よくく花入にハ梅つきさき

かよきくと帆柱高き入江かな

三晁都ひとりあるし

梅椿さや咲つらむ保美の里

雑之部

酒好る人の絵に

月花もなくて酒のむ独りかな

芭蕉の絵讃

物いへハ唇寒し秋の風

三聖人の図

月花の是やまことのあるし達

かちならハ杖つき坂を落馬哉

あさよさを誰まつ嶋の片心

元文四己未年

二月下旬

京寺町二条上町
井筒屋庄兵衛

同　宇兵衛

芭蕉翁并門人
俳諧書林

安政四巳未年

二百十日